

天使の黄昏

有森 信二

私は、「母の記憶」という詩を書いたことがある。
八月九日。あの瞬間のぶざまな戦慄を、川棚というところで知った。

そんな書き出しで始まる短い詩は、「あの日の空があまりに乾いていたから、大村湾を渡ってくる得体の知れないどよめきが、赤々と、喉元を焦がし」と続き、「ものたちが、天空へ天空へと塗りこめられていくなかで、めくるめくような晴れがましきさえ感じながら、じつと、逆さまの海軍工廠を見上げていた」というところで終わる。

しかし、私自身、こんな詩を書いたことを全く忘れていた。

昨年の秋、いまの住居に越してきたとき、古びたノート類を整理していて、たまたま見つけたのだった。気負った五十編ほどが並ぶなかで、（私にしては）いくらか抑制のきいた方の部類に入るこの詩が、最後にあった。

ノートの日付からみて、十六歳のときのものであるから、母が帰ってくる三年前の作になる。当時、どういう心境でこの詩を手がけたのだったか、いま確たることなど思い出すすべもないが、母について、単なる想い出などというものを書こうとしたのではなかったことだけは確かである。

川棚の海軍工廠に、学徒動員で徴用されていたときの、まだ少女そのものであった筈の母。私を宿すずっと以前の、いわば原初の母の姿。そんな母の心の襞に分け入り、肌の温もりをまさぐろうとする衝動が、私の気持をつき動かしたのだったろうか。

事実、このときまでの私には、そんな母のイメージと馴れ合うことのできる寛容さが、十分残されていた。

今日の母の病室は暑苦しかった。冷房は確かに効いているのだが、医師や看護婦の出入りが多く、部屋の空気があわただしくかきまわされるため、そう感じただけなのかもしれない。その証拠に、殆ど眠ってばかりいる母の額には、汗の粒は浮いていないのだった。

母が心臓の手術をして十日が過ぎた。術中に搏動が五分間停止し、術後も一進一退を繰り返していたが、ようやく集中治療室から元の病室に戻されてきた。医師の術前の予想では五分五分ということだったから、母はどうやら十時間の手術を経て、五割の好運の方を引き当てたらしい。

よくよく運の強い人だ、と思う反面、よくもこれだけ幾条もの糸に操られなければならぬ人だ、と感心する。

そして、こうして永らえることが、母にとってどういう意味をもつことになるのだろうか。

いまの母には、もう私しかない。手術の経過からみて、多分これまでどおりの一人暮らしは無理であろうし、私のアパートへ越してきたところで、妻の京子が十七年勤めた司書補を辞めるとはいわないだろう。中学二年の麻美は部活で疲れ果てて戻るばかりだし、小学五年の喬は学校から帰っても殆ど家にいない。

三月前に、知り合いの医師からこの総合病院を紹介されたとき、「手術などしたくない」と母は訴えた。しかし、私が「これしか救かる道はないのだから」と無理矢理勧めたのは何故だったのか。私の心の奥底に、母に対するなにがしかの残酷な気持が、いまもやはり蠢いていたのだったろうか。

母は、私を捨てた。

私と妹を捨てた。私が七歳、妹の典子が五歳のときである。

母は誕生を迎えたばかりの弟の清治と二人、時化の海に入った。師走もおし詰まった三十日の未明だという。

連絡は、私がまだ目を覚まさないうちに入った。誰かが表の雨戸を激しく叩いていた。前の晩、どういうわけか夜更けまで寝つけなかった私は、柱時計が一つ打つのを聞いてようやく眠りにつき、しんとした眠りの底に深く沈んでいた。その眠りを、一挙に打ち砕くほどの激しい音だった。

薄明かりのなかで枕元を見やると、丹前をはおった父が、火鉢に頭を突っ込みそうな格好で鼾をかいていた。火鉢の傍には、空になった酒の一升瓶が二本と、湯呑み茶碗が転がっていた。

どんなに遅くまで飲んで、どんなに遅くまで遊び歩いて、日の上がる前には起き出す父にしては珍しいことだった。父は母よりも、祖母が生きていた頃はその祖母よりも早く起きる人だった。味噌汁の匂いが部屋中にたちこめる時間になってやっと目を覚ます私が、歯を磨き始める頃には、父は鍛冶場から濡れ通るほどの汗を拭き拭き上がってきた。

その父が眠っている。いや、正体不明に酔っているのだった。それが証拠に、鼾の途中で「バツカヤロウ」と涎にまみれた甘ったれた声を出す。声を出す度に、火鉢の灰がわずかに舞い上がって散った。

「玄三、開けろ」

私は、そのときふと、いつも典子の向こう側にある筈の母と清治の布団のふくらみがなく、その一隅が妙にしらじらした朝のほの青

い光を溜めていることに気付いた。

「うるせえやい」

父は短かく呟いた。呟いたというより、ひくつと体を痙攣させた。私は跳ね起き、土間にまわって玄関の門にとびついた。しかし、手元が暗く、わけもわからず気持が急かされるので、簡単に開かない。その間にも「玄三、玄三、開ける。おう、急がんかい」という声が間なしに続いている。

「なんだと、やつは酔っ払ってるだ」と

父の釣り仲間の光義だった。光義は、タオルを頬かむりにしたまま、長靴も脱がずに上がってきた。そして、軒をかいている父を見下ろすと、長靴で父の膝を蹴り上げた。父は、反動で襖に吹つとび、倒れかかった襖をゆっくり押し上げながら、「加代子がどうかしたのか」と笑い顔でいい、また火鉢のなかにつんのめった。

朝釣りに出かけた光義が岩場で見かけたものは、波間に見え隠れする二人の姿だったという。そのまま冬の海にとび込み、どうにか二人を浜辺まで引き上げたときには、幼い清治は既に息絶え、母も仮死状態だったという。

私は父と母の間を何が分け、二人が何をどう話し、どういうことが原因で母が入水することになったのか、いまのままで詳しくを知らない。私が聞くことをためらったせいもあるが、父はそのことに話が及ぶと途端に不機嫌になり、黙り込んでしまうのだった。

しかし、清治が生まれる以前から、父と母の間には毎晩口論が絶えなかった。

母が清治を身籠もっている間に、父は飲み屋の娘と親しくなってしまうたらしい。殆ど毎晩、まだ二十前の娘に会いに出かけ、帰ってくるのはいつも二時、三時だったという。「なんで、俺がとやかくいわれなきゃならんのだ。お前なんかと違って、俺の場合なんかかわいいもんじゃねえか。ふん、お前の体の上には、いまも両手に余る男の影が蠢いている。お前の淫乱の、そのどす黒い血をすすろうと集まってきた青白い文学青年だなどとぬかす、ご大層なやつらのな」

「誤解です。私が淫乱だなどと、どうして、そんなことがいえるのです」

「淫乱でもない女が、なんで何人もの男たちに体をまかせたりする。え、おまけに、自分からすり寄っていった、というじゃねえか。そんなこと、この村じゃ誰一人知らんもんはない。どうだ、返答できるか」

「いいがかりです」

口論は、父が夕飯前の酒を飲み出すと決まって始まった。父は、

腹を突き出し動けない母を前に、癩性なほどに唇を舐めながら責めた。

母は、両手で耳を押さえ、背を壁にもたせかけているのだったが、父のことばに髪を振り乱しながら、「違う、違うんです」と叫んだ。

父は、母がことばを返す度に唇が紫色になるほど歯を食いしばり、母の顔を殴りつけ、首を絞めあげた。その度に息を荒げる父は、母が突っ伏してしまいうまで襟首をつかんで引き摺りまわすと、残りの酒をあおり、玄關の戸を揺らしてとび出していった。

「大学病院に勤務する克夫兄さんのところへ遊びにいった、別れてきたばかりだったの。西の空に真赤な雲が湧いて、ゆっくり広がったかと思うと、空を焼き始めた。昼も夜も、それはそれは血の色に染めてね。私は、間違ひなく克夫兄さんの身に大変なことが起きたと直感したわ。そう、妹の私にはわかるの。この胸に、しびれに似た痛みがずんと走ったわ。私は思わず克夫兄さんの名を呼びながら、その真赤な空に向かって無我夢中で駆け出した」

そんなとき母は、目を閉じ、肩を震わせながらうわごとみたいに呟いた。

それ以上を母の口から聞いたことはないが、噂では、泣き惚け、さ迷っていた女学生の母を見かけた文学仲間の男たちが、部屋に連れ込み、介抱するとみせて代わる代わる凌辱したのだという。それも、母の口に機械油にまみれた布を押し込み、両手首を縛りあげたことだったという。

私の知っている父は、飲まずにはいられない人だった。

それがもとでか、長い間胃潰瘍を患っていたが、ちよつとした足の傷を化膿させ敗血症であっけなく死んだ。三十八歳だった。だから、息絶える直前まで、殆ど飲んでいたといつてよい。

しかし、半年間だけ、一滴も酒を口にしなかったことがある。

清治の葬式を終えた翌日、父は家中の一升瓶をげんので叩き割り、ふいごの炎のなかに次々に放った。いつも赤ら顔の父が、こめかみをひくつかせ、透き通るほどに青ざめていた。

「加代子には、二度とこの家の敷居はまたがせん」

父は、ふいごの炎に溶けていくガラスの色を、瞬きもせずに見つめながら、そっくり放った。

そのときから、「あれだけの腕がありながら、酒に飲まれてしまふばかりに」と、村人の噂が絶えなかった父の前から、酒の瓶が消えた。

私たち三人の兄弟のなかで、清治が一番父に似ているといわれていた。私と典子が母似なのに対し、幼い清治の方は外開きに突き出し加減の耳の形といい、細い顎の線といい、くつきりした二重瞼と

いい、どこをどう見ても父そのものだった。それだけに、父は清治ばかりをひどくかわいがった。酒を飲まない昼間の父は、鍛冶場のゴザに清治を寝かせ、ラジオをつけっ放しにして流行歌を聞きながら鉄を打った。もともと父の作る鋤や鍬や鎌は、使い勝手がいいと村人たちに評判がよいのだったから、その気になれば注文はいくらでもきた。

父は注文の品をオート三輪に積み、運転席の横に特別にあつらえた座席に清治を乗せ、鼻歌まじりに出かけていった。配達の間には、潮時をみはからって光義たちとしめしあわせ、オート三輪の荷台に積んでいる釣糸を海に垂らした。

その清治を失った父は、意識不明のままですったん運ばれてきた母を、玄関払いに母の実家にひきとらせた。

「あいつはな、初めっから俺を馬鹿にしてやがった」

酒を断った父は、夜明け前から夜更けまで焼けた鉄の赤さに体中を火照らせ、汗を滴らせ、狂ったのではないかといわれるほどに鉄を打ち続けた。

父が酒を断って半年ほど経った頃、実家に籠もっている筈の母が姿を消した。たまりかねた母の兄が、父に心当たりはないかと尋ねたのがきっかけで、母の不在が村中に知れわたった。母が姿を消して、半月近くになるのだという。

母はしばらくして、意外なところで発見された。連れの男と長崎の旅館にひそんでいたのを、男の友人に偶然見つけたのだった。

男は津田といい、母の女学校時代の教師であり、母の属する短歌誌の主宰者だった。津田には、母とそれほど年格好の違わない娘もいて、二人の孫もいた。

なんでも、母の方から津田のもとに逃げ込んだのだという。発見されたとき母は、包丁で手首を切りつけている。その傷は、いまでも五センチほどの跡として左手首に斜めに走っている。

父は、津田と母が長崎に逃げていたと知らされた途端、襖を蹴倒し、飯台を蹴返して逆上した。

「いわんこつちやない。淫乱女の、いかにもやりそうなことさ。だからいったら。あいつの体には、幾人もの男たちの生霊がとりついている。そんな女が、土台、俺のことをなんのつもりでとやかくいえるのだ」

父は、唇にねばりつく唾を、何度も土間に吐いた。

その晩、父は半年間断っていた酒をしたたか飲み、空を跳ねる勢いで家をとび出したきり、帰ってこなかった。

「直也も典子も誰の子かわかったもんじゃねえ」

以前から父は、このことばでも母を責めていた。母はその度に、

「そんな、とんでもないことを」と、肩を震わせてあらがうのだったが、「じゃあ、あいつらとは、全くなんの関係もないといえるのか」とたたみかけられると、目を張り裂けんばかりに見開いたまま口を噤んでしまう。挙句に父は、「第一、そんな傷ものででもなかつたなら、俺みたいな男のところになんぞ嫁にくるわけはねえしな。全く、馬鹿にされたもんだ」と、さらに執拗に絡んだ。

その「あいつら」と津田が同一の仲間であったのかどうか知らないが、父は、母が自分より上級の学校を卒業し、自分の目を盗んで同人誌とかいう本を読み、自分には理解できないことばをノートに書きつらねているのが、もともと我慢できなかったのである。実際母は、G町で開かれる月に一度の同人会には、私や典子を家に残したまま出席し、その日は十二時過ぎに帰宅することも珍しくなかったという。

私がもの心ついて最初に知った母についての事件のあらましは、大体こんなことだったろうと思う。当時七歳でしかなかった私がこれだけのことを覚えていてるのは、子供心にも母のことを懸命に忘れようと努めてきたから、その印象がかえって鮮明に心の奥底に焼きついたのではなかっただろうか。

それからの私と典子の日課は、酔いつぶれた父を連れ戻しに、行きつけの飲み屋に通うことになった。

親しかつた飲み屋の娘は大阪方面の店に出ていった後であり、相手を失った父は、殆どの場合、正体なくカウンターに突っ伏しているのだった。幾度かは鼻血を出し、頬を腫れあがらせたまま床に寝かされていた。「どいつもこいつも俺をこけにしやがって」と、髪をふり乱し、伸びた顎髭にはあぶくみみたいなものを滴らせ、前後ろによろめきながら、私と典子の肩につかまり、夜道を歩いた。

「畜生、鍛冶屋だと思って馬鹿にしやがる。なにが短歌だ。なにが文学だ。フン、なにが鉄を打つ音軽やかにして、だ。笑わせちゃいけねえ。あいつらに、鉄を打つ音のどこがわかる。なにが軽やかだ。わかっちゃいねえよ。実際だな、机の上で頭をひねりまわすだけで、ずしりと重いげんのう一つ担ぐこともできねえ腰抜けの連中がだ、よくもこんなでたらめを軽々といえるもんだ。ただ学問があるということだけでよ、盗人みたいなこすっからい真似しやがってよ。おまけに、世間までもがやつらの味方だ。笑わせやがるぜ、全く」

しかし、昼間の父は以前に負けず鍛冶場に籠もって、黙々と鉄を打った。注文も減りはしなかったし、父の腕は冴えていた。私が足元をよろけさせながら父の打つ鉄を支える役目をしたり、おぼつかないながらも典子が炊事や洗濯を手伝うようになった。

学校で、飲み屋で、村人たちの間で、父の酒癖の悪さが噂にのぼ

った。上物の鼻がいながら、二十の娘の尻を追い回し、逃げられたのだ。母が入水をしたのは、父が嫉妬のあまりがんじがらめに母を縛ろうとしたからだの。もともと傷を負って実家に籠もっていた母の元に、毎日毎日通い詰め、拝み倒さんばかりに頭を摺りつけ、もらつてきたのは父ではなかったかだのと、どれもこれも父に厳しいものばかりだった。

でも、噂がどんなにあからさまに話されても、私は父を恨んだり、疎ましく思ったりする気にはならなかった。私と典子にとつて、父は、同じ傷口を舐め合うことのできる唯一の仲間であった。

私は、晩年の父が、どのように無能呼ばわりされ、不具廢疾者扱いをされようと、その子供であるということを、意地でも誇りたいとさえ思つた。これは、同じ傷口を舐め合つた典子にも、間違いないといえることだと思つている。

いま、私は長い間母のことを忘れようとしてきた、といつた。とはいえ、バスで一時間足らずのところまで暮らしている母のことが、そう簡単に忘れられるものではない。いや、忘れようとしても、村人の話の端によくよくのぼるのである。

母は、津田とのがあつてから五年ばかり経つた頃、T教の信者として布教を始め、いくらしないうちに実家の近くに分教会を建て、教組に次ぐナンバー二におさまつたと聞いた。

母の説く教えは、光と水の神を信じれば、悪疾は去り、悩みごとは解消するのだという。最初は半信半疑でいたという村の人々も、実際にその効果を目のあたりにし、またその教えを説く人物が、一度入水して奇跡的に救つた母であつたから、かなりの効果があつたらしい。

母の教会は次第に栄え、信者のなかには、父の窮乏を見かねて入信するように勧める者さえいた。これには、父よりも典子の方が怒つた。まだ十歳の典子であるが、どうかすると私よりもずっと大人びていて、自分たちを見捨てた者が、何の功德があつて人の上に立ち、道を教えることができるのか、という。

「冗談じゃないわよ。我が子を殺したのよ。我が子を平気で捨てたのよ。鬼じゃない。殺人鬼よ。冷血動物だわ。そんな人間ともいえない人間が、どうして人の悩みを解くことができるの。嘘に決まつてるじゃない。みんなもみんなよ。そんな動物の化物についていくなんて、どうかしてるわよ」

典子は、母の面立ちに似た細い鼻先に小さな皺を寄せ、三つ編の長い髪を乱暴に解きながら、はすつぱにいう。

その母は、いまは多数の信者を従え、絹の衣装をまとい、祭壇の前で祝詞を唱え、次第に恍惚の状態になつて、しまいには絹の衣装

を翻して舞い始めるのだという。すると、信者たちの手も足も母の動きにつられて舞い上がり、空の高みを漂うのだそうである。

「それはもう極楽でな、二十年も痛んでいた腰がいつぺんに治ってしまおうた」

信者の一人は、注文の鍬の催促にかこつけて、父に何度も同じことを話した。

「魔物が棲んどるんじや」

鉄を打つ間はめつたに口をきかない父が、その男の口上に辟易したのか、ベツと唾を吐き、眉を逆立てた。「そんなにめつたなこというもんでねえぞ。罰が当たるぞ」男は父の剣幕に押されたのか、逃げ腰になりながら、なおも喋るのをやめないのだった。

私はというと、母の噂を聞く度に、冷めていた気持がどこかの部分で小さな燠となり、吹きくすぶり始めるのを感じながら、やはり厚い扉を重ね、固めていくのだった。

典子の方は、五歳という一番母親に必要な時期に引き離されたのであり、母に対する想い出も殆ど心に刻み込まないままに別れたのであったろうから、典子にとつての母は、殆ど切実な像など結ばないに違いない。

まして典子は、母がいないことで学校に行く二時間前には起き、炊事、洗濯、掃除と、一通りのことをしなければならなかった。同学年の子供たちが遊びの約束をしたり、漫画やテレビの話をしたりしても、輪のなかに入れなかったし、身に着けるものも、とても同じ女の子のそれにはほど遠いものであったろう。

しかし、典子に比べると、私の場合はいささか弱い。

私の耳には、

「大学病院に勤務する克夫兄さんのところへ遊びにいって、別れてきたばかりだったの。西の空に真赤な雲が湧いて、ゆっくり広がったかと思うと、空を焼き始めた。昼も夜も、それはそれは血の色に染めてね。私は、間違いないく克夫兄さんの身に大変なことが起きたと直感したわ。そう、妹の私にはわかるの。この胸に、しびれに似た痛みがずんと走ったわ。私は思わず克夫兄さんの名を呼びながら、その真赤な空に向かって無我夢中で駆け出した」

そう話すときの母の興奮が、なぜか木霊となって脈打ち、残っている。それを話してくれるときの母は、体中で私を息苦しいほどに押し包み、どんなものにも渡さないと、齒の根を鳴らしながら、ありったけの力でくるみ込んだのだった。

いまにして思えば、私をありったけの力で抱きしめたということも、父とのいさかいの果ての碎け散りそうになる気持を、なんとか拾いとめようとしただけのことであったのかもしれないし、あるいは忘れ去ろうとしても忘れられない、八月九日の日の忌まわしい出

来事に、単に怯えていただけだったのかもしれない。

しかし、私の肌には、あのひしと包み込んでくれた母の体の温みとわななきがありありと残されており、泣き惚けてさ迷ったとき、見開かれた母のまなこにふくらんでくる涙のさまが、いまでも鮮明に映るのである。

母は、教会で男の子を生んだ。そしてその子は、生後十日ほどで、子供のいない信者の家にもらわれていったという。

子供の父親が誰であるのか、私は知らない。津田という教師であるのか、教会の誰かであるのか、知ろうとも思わない。ただ、父が執拗に母を責めていた「直也も典子も誰の子かわかったもんじゃねえ」ということばが、にわかには真実味を帯びて私の前に立ちあらわれてきた。

私は、はたして父の子供であるのか？ もし父の子供でないとしたら、誰の子供であるのだろうか。そんな疑問が次々に湧いてきて、頭を締めつけた。

私は母の子供ではなくても、父の子供でありたかった。飲んだくれて、廃人同様になって死んだ父ではあるが、やはり父の子供でありたかった。

父は、私が中学を卒業すると間もなくして死んだ。深酒がもとで胃潰瘍を患い、最後の数年間は薬を常用していたが、鍛冶の方はなんとか細々とこなしていた。農機具が機械化され始めてからというもの、注文は年々少なくなり、鋤、鍬といった分どまりのよい品物の注文は、極端に減っていた。

包丁や鎌類の切れものにしても、スーパーや大型店の出現で客を奪われており、体力の落ちてきた父は、少ない注文品を、それまでの数倍の時間をかけてこしらえた。

だが、仕事のないときは酒だった。わずかの酒にも呑まれるようになった父は、飲み屋のガラス戸を破り、客といさかいをし、大小便を垂れ流したままで道端に寝転がった。私が背に負い、典子とともに戻るそんな父を、「玄三も、なんと魂なしになったもんよ」と、村人たちは遠巻きに見送った。

しかし、父は、まがうことなく、私と典子を最後まで捨てなかった。どんなに酔いどれても、悪態をついても、村人たちから痛罵をあげせられても、私たちと同じ傷口を舐め合ってきた。

父の命を奪うものになった足の怪我は、珍しく飲まずに鍛冶をし、半日の仕事から上がった後、隣家の子供が高熱を出したというので、G町の病院までオート三輪で運ぼうとするときに負った。

布団を敷いて子供を荷台に寝せ、運転席に乗ろうとしてドアに足指を挟んだのだった。父は痛みをおして病院まで車を運転し、帰り

着いたときまでは比較的元気だったのが、酒を吹きかけただけの傷口が化膿した。「こんななんざ、放つときや忘れてるうちに治つとるもんよ」と、私たちの心配をよそに、父は傷口のことなど意にもかいさなかつた。

それから二週間目に、父は死んだ。熱にうなされ、痙攣を繰り返して、わけのわからないことを叫び、私や典子の見わけもつかず、畳を布団をボロボロに引き千切つた。

「あいつはな、初めっから俺を馬鹿にしとつた」
まだ意識がまともだったときの、父の最後のことばはこれだった。

私が働くガソリンスタンドに、母が訪ねてきたのは、四、五日前からよどみなく降り続いていた雨が、昼頃によくやく止んで、どろりとした雲がまだ山の端にかかっている頃だった。

水玉模様洋装の婦人が、赤いタクシーから下りたつた。品のよい洋服を隙なく着こなした婦人は、甘い香水の匂いをあたりにまき散らし、真直ぐに私の方に歩いてきた。

「直也さん」

婦人はそういつて目をみはつた。

そういう呼び方をされることは日頃の私にはなかつたので、なにごとかと身構えた。そしてふと、定時制にこの春新しく転校してきた教師の誰かだろうか、と考えた。しかし、教師なら姓を呼ぶ筈だし、こんな生徒の職場にわざわざ訪ねてくることはない。首を傾げていると、「直ちゃん」と胸を詰まらせるふうである。

私が思い当たつたのと、婦人が涙のあふれた目で見返したのが同時だった。私の体は、反射的に母の前からとびすさつていた。とびすさつたばかりか、逃げようと思つた。

目の前に、そのままのかたちで母の姿があつたら、私は県道をどこまでも走り、逃げおおせていた筈である。ところが、目の前からスツと母の姿が消えた。

母の体はあつという間もなく、コンクリートの上に鈍い音を残して倒れたのだった。

「冗談じゃないよ。誰が会ってやるもんか。第一、いま頃おめおめと帰ってこれる訳ないだろ。それも、私が母親でございませう、なんて口が裂けたつていえる筋合じゃないよ。いったいなんだと思つてるのさ。捨てたんだよ、このあたしらを、あいつは」

典子は、近所で噂を聞きつけてきたのか、玄関から入ろうとせず、私を裏庭に呼んで、それも居間にいる母に聞こえよがしに金切り声をあげた。父と私と妹という男世帯にあつて、女の子らしい夢をおそらく何一つみることもなく育つたであろう典子が、美容師見習い

として、やつと自分の洋服の二、三枚も買えるようになっていた。「兄さんも兄さんさ、なんだって家に入れたりしたんだ。で、どうするつもりなのさ。あいつとは親でも子でもないって、ちやんと念を押してたじゃないか。駄目だよ、絶対。あいつが入るのなら私が出る。そのどちらかしかない」

こんな典子のことばを聞いたのは久しぶりだった。私にとって普段の典子は、始終いつもどこかビクビクしている、体格だけは一人前の妹でしかなかった。

「実は、俺も困った。親父の手前もあるし、お前のことも考えた。俺だって、すなおにハイそうですか、とはいえないよ。でも、やってきたんだよ、向こうから、いきなり」

私は、吸い終わらない煙草を、何本も何本も足で踏みにじった。典子の手を掴み、このまま家を出ようか、とも考えた。しかし、そうすると、父一人を残していくことになる。私と典子の給料を足し合わせ、新しい仏壇を買い、父と清治の位牌をこしらえたばかりだった。私は、嫌がる典子の肩に手をかけ、無理矢理玄関をくぐらせた。

「合わせる顔がないってことはよくわかっています。あなたたちが、どんなに辛い思いをしたか、私も陰ながら聞いています。そのことでは、何百回、何千回頭を下げても済まないと思います。取り返しのつくことではないけれど、もう一度あなたたちと力を合わせてやっていきたいのです。そのかわり、これからはお金のことや食べ物のことで、あなたたちに絶対心配はさせません」

居間に入ると、父と清治の位牌に手を合わせていた母が、私たちの前に駆け寄り、どうかこのとおりだから、と頭を畳に摺りつける。典子は、「なにさ、この盗人猫」と叫んだきり目をそらして唇を震わせ、私は火の点いていない煙草をくわえたり離したりしながら、「お金や食べ物だけじゃないんだ」といったもののが続かず、なにか支離滅裂なことをしでかしそうで、必死で自分を押しとどめていた。

後ですぐにわかったことだが、母は教会を追放されたのだった。母の布教の巧みさと統率力は教組や幹部も十分認めるところであったが、不明な経理と、華美な生活、それに父親の分らない子供を生んだということが、追放の原因であったと聞いている。

ところが、母のいい分によると、教会を追われたのは一部の野心家が自分を陥し入れようと企んだ結果であり、教組の教えは、自分の身内に脈々と生きているというのだった。

そういうわけで、母の計画は、まず失った布教の場を取り戻すために私の家を教会に改造し、新しい信者を集め、いま一度隆盛を期

す、という。そのために、母が持ち帰った荷物といえは、教本が五、六組、絹の衣装が二組、あとは半月分ほどの生活費と化粧道具に洗面具、という具合だった。

「私には、この地で光と水の教えを広げる任務があります。そのために一握りの心ない人たちから迫害され、この地に赴くよう、教組様ははかられたのです。私の目には広々とした湖が見え、喜びに満ちた村人の生活が見えます」

「湖、いったいなんのことよ。またわけのわからない男の子供を生まみ、捨てるつもりなの。性懲りもなく、何度も同じあやまちをやらかそうつての。選りに選つてこの家で。少しは、父さんやあたしたちのことを考えてみるべきよ。いいこと、この家の敷居はあんたには二度とまたがせないよ、父さんはいったのよ」

典子はヒステリックだった。面長で色白の顔立ちに、黒目がちの大きな瞳をもつ傍目にはそっくりの二人が、どうしてこのようにいい募るのか、私でさえふと奇妙な錯覚に陥ってしまうほどだった。

「神の子は人間の子ではないのです。神に祝福された聖体だけが、啓示により懐胎することができます。まして、聖職者には、男女の関係など許されません。聖職者は、ただ神に向かい合うのみなのです。私たち一人一人の罰や穢れをすべて神の前に投げ出し、裁いてもらうのです」

母は静かだった。どこか、壁の向こうからでも語りかけるかのごとく、高く、遠く、もどかしいほど抑揚のない喋り方をした。

私には、あのガソリンスタンドに現われた母と、こうして落ち着き払っている母とが、はたして同一人物なのかどうか、合点がいかなかった。

海軍工廠を逆さまに見上げたまま、文学仲間の男たちに次々に凌辱されたという母。それは、私たちを宿すはるか以前の少女そのものの、まだあどけなさの残る原初の母の姿であつたらう。母は、舌を噛むこともできないよう口に布を噛まされ、次々に男たちの情欲にまみれた精を受け入れねばならなかったのだ。

恐らく、拭い去ることなどできないほどの傷を負つたに違いない少女は、自ら生命を断つこともできず、赤々と空を焼くどよめきが天空へとのぼりいくのを、しどけなく板の間に横たわつたまま、めくるめくような思いで眺めていたに違いない。

そして、父との出会い。父との口論の日々。

私を抱きしめ、震えていたときの母。清治とともに入水した母。それが半年も経たないうちに津田の元に出奔した母。長崎から連れ戻されたと思つたら新興宗教に入信し、父親の分からない子供を生んだ母。ある日突然、捨てた筈の私たちの前に舞い戻ってきた母と、

それからさらに信じられないほどの母の行跡は続くのだが、こうしていま点滴の針に痩せた腕を刺され、鼻からはチューブをさし込まれ、胸にはぶ厚くガーゼが巻かれて、ものもい得ず、生と死の縁を行きつ戻りつしている母を見詰めていると、いったい母の体内にめぐっているものはなんだろう、と考える。

三か月前の転院から十日前の手術に至るまでの間、母は自ら生き延びようとする意志を殆ど示さなかった。それは、倦んだとか疲れたとかいう類のものではなく、かといって、動き得ない体になってしまったための肉親の私に対する遠慮、などというものとも違っていた。

こうしていま、よくよく考えてみると、あるいは母の体内を原初から貫いていたのはある一つの法則ではなかったか、と思ひ当たるのである。つまり、自ら照らすことのない月が、太陽の光を得てほの白く輝くといった、またその月の運行によって干満を繰り返す潮汐のごとく、操られ、流れてやまない一つの波動。こういうものはなかったかと。

「西田さん」

母の頭上のインターホンが、名前を呼んだ。「西田さん、西田さん」と続けて呼ぶ。私は返事をしようとして、西田というのは母であるのか私であるのかどちらのことだろう、とふと思ひ直した。考えてみれば、一度家を出たものの、母はずっと西田であった。

こんな肝心なことを忘れてしまうほど、ずっと私たちは隔たってきたのだ。

私は病室を出て、廊下の端にあるナースセンターに顔を出した。なかに顔見知りの看護婦がいて、電話ですよ、と受話器をさし出してくれた。

「お婆ちゃん、どうなの」

妻の京子である。職場の内線かららしく、声が低い。

「なんとか危機を脱しそうだ。今日、元の病室に戻されてきた」と応えると、「あら、しづといのねえ」とさざりという。

喉元まで少し荒いことばが出そうになったが、ぐっと飲み込んだ。考えてみれば、孫の相手一つするではなく、気の向くままにふらりとやってきては四、五日泊まり、あれこれ指図して、また好きなきにふっと消えていく母の面倒を、京子は一人でみてきたのである。京子には、京子なりのいい分がある筈だ。

これが典子だと、とてもこうはいかない。似た者同士が、爪を剥き出しにして向かい合う。

「もう三日になるのよ、そちらの泊り込み。その前に一晚帰ってきただけだから、十日にはなるわ。まだ、手が離せないのかしら。いえ、私は私の分をあなたに替わってもらっていると思っっているか

らなんともないけれど、大丈夫なの仕事の方」

京子はそのままでいって電話を切った。私の仕事が大丈夫か大丈夫でないのか、手術の初日に上司に電話で経過を報告したただけだから、私にもその後のことはわからない。受話器を置くと、窓の外を見た。外には樗の大樹があつて、窓を開けて手をさし出せば届きそうなところまで太い枝が伸びており、緑の濃い葉が小さく揺れている。

十日前にはこんな深い緑であつたろうか。と、陽光を翻して照る青葉を見詰めているうちに、このわずかな十日間が、母と私とつての四十数年にも重なる思いに満たされ、瞼のなかの濃い葉の繁りが、いつの間にか白く震えてきた。

母は、家に戻ってくると、私と典子の猛反対を押し切つて、さすがに母屋の改造こそしなかつたが、裏庭に二十坪ほどの離れを建てた。資金は、母にはまだまだ調達の道があつたとみえ、そのスポンサーからの出資ですべてまかなつた。

離れが完成すると、どこからか二人の男を呼び、まず墨黒々と教会の看板を掲げた。祭壇には御神体とやらを安置し、板敷には三十枚ほどの畳を敷きつめた。

看板を掲げると、不思議なことに、一人、二人と近在から人が寄つてくるのである。以前からの信者なのであろうが、彼らは母の舞いによつていやされたとかで、前の教会を追放された母の失態の方には目をくれようともしない。

一度、私は試しに教会を覗いてみた。そして、その場の異様さに驚いた。

母は、丈の長い絹の衣装をまとい、髪を振り乱し、口や手を小刻みに震わせ、低く唸りながら、祭壇の前で光と水の形象だとかいう舞いを踊っていた。同じ方向に回りながら、目は宙に漂わせ、一定のリズムでゆつくりゆつくり舞う。

すると、母の舞いにつられて信者たちが立ち上がり、合わせてゆつくり回り始めた。絹の衣装の大きな舞いと、信者たちの小さな舞いとが整然と、しかもいつまでも飽くことなく続いていく。

そのまま眺めていると、入口に立ち尽くす私までもが舞いの渦に吸い込まれそうで、あわてて逃げ出し、後ろ手にドアを閉めたのであるが、乱れた呼吸がしばらくは整わなかつた。

典子は、「お勤め」の合図である拍子木の音が聞こえると、耳を両手でふさいで突っ伏した。「けだもの。人でなし。なによ、あの勿体ぶつた格好は」そう叫んで、床を打ちつけた。

「あんなやつ、絶対、蛇か狐か狸の使いに決まっている。あの、同じ方向に回るところなんか、大蛇がとぐろを巻く姿そっくりだわ」「あいつなんか、絶対この家の敷居はまたげない筈よ。自分がなに

をしてきたのか、まともだったらわからない訳ないじゃない」
典子は、爪先から血が滲み出るほど畳を掻き毟り、私たちの家までがいいように使われていると、口惜しがった。

いつの間にか、母の教会は信者であふれだした。夕方、まだ日が落ちない前から、裏庭には一様に頬を上気させた男女が、どこからともなく集まってきた。

母の日課はというと、教会の方で起き臥していたので正確なところはわからないが、朝の五時に床を出、井戸の水で全身を清拭した後、祭壇に水や果物や野菜の捧げものをして、御神体の前に座り、低く祝詞をあげる。それが済むと、男たちが掃き清めた庭に出て四方に向かって礼拝する。

一日の始めは必ずこの順序で行われ、以下朝食、お勤め、短冊づくり、畑に出たりの作務、昼食、お勤め、水行、そして夕方からの舞いのお勤め、という具合に続く。

私と典子は、努めて母とは無関係に、自分たちの生活を続けた。私はガソリンスタンドに出、夜は定時制に通い、典子はG町の美容院で見習いとして働いた。自分たちは自分たちなりの、その日の生活が細々とはあるが、いくらかずつはできるようになり始めていた。

誰に習ったのでもない私の詩作は、ノート七、八冊を埋めるほどになっていたが、一度国語の教師に数編を見せたところ、「筋は悪くないが、思い込みが過ぎるね。こいつを直しさえすれば、ひよつとしたらどこかの詩誌がとりあげてくれるかも知れないな」といつてくれた。だが、結局どこの詩誌に投稿することもなく、そのときそのときの私の心の断片をなぐり書きに写したまま、いまに至るまでノートのなかで眠っている。

教会に起き臥するようになってからの母は、一段と若さをとり戻したかに見えた。私や典子や清治、それに信者の家にもらわれていった男の子の、四人を生んだとはとても信じられないほどに若く、肌はきめ細かで、前髪を垂らして横に切りそろえて流した格好は、女学生と見間違うほどであった。

信者たちのいうとおり、信心をしていると病気や怪我もなく、歳も重ねないで済む、ということがあながち誇張ではないのかもしれないと思われるほどだった。それに、母だけでなく、集まってくる信者たちも、いく分頬を上気させ、そろって柔和な表情をしていた。

その頃の私は、母の体内には、もしかして本当に神が宿っているのかもしれない、と真剣に思ったことさえあった。

しかし、典子の方は、「男を誘う女狐の匂いがふんぷんしている」と、私の見方とは正反対のことをいった。

「あの、いかにも穢れを知らないかのような内容を並べたことば、仕種、表情、あれはまっかな嘘っぱちのつくりものよ。私にはわかる。あれは自分に酔っているのよ。自分の姿が塗り変えられていくのを、舌なめずりしながら見詰めているときの、鏡のなかの女そのものだわ。あいつのなかに神が宿っているとしたら、それこそ蛇や狐や狸の化身に違いない。そんな女のどこに、人を救うなんてご大層なことがいえるのよ」

美容師見習いの典子には、そんな母の、嫌な女の部分が見えたりするのかと、いつの間にかすっかり大人の目をもちきたった典子の成長に、驚かされるばかりだった。

そんなとき、信じられないことが教会で起きた。

私は、定時制を卒業すると同時にガソリンスタンドを辞め、小さな経理事務所に勤め始めていた。経理事務所に勤め始めて二か月と経たない夕方、つまりいまから二十八年前の五月半ばのことだった。帰ってみると、玄関に救急車が止まり、赤い灯を点滅させている。なにごとかと、オートバイをとび降りると、教会の方で人だけかりがしている。

「会長が刺された」

「違う、倒れたんだ」

「いや、キナ臭い臭いがたちこめていたから、これは火薬だ」

要領の得ないことを口々に叫び、中庭でひしめき合っている。

人ごみをかき分けて進もうとすると、教会のドアの方の人垣が割れ、担架が運ばれてきた。担架に乗せられているのは、顔中に包帯を巻いた母だった。私が母の傍に寄ろうとすると、もう一方の人垣がざわつき、頭からジャンパーを被った男が駐在に引かれて出てきた。男は顔を覆っているが、母が教会を開くときに連れてきた二人のうちの一人であることはすぐにわかった。

救急車の母に寄り添うと、すえた薬品の臭いがした。「急所はそれていますから」と、私を身内と見てとった乗務員が、明るい声でいつてくれた。

母は、舞いのさなかに、農薬まじりの熱湯を顔面に浴びて倒れたのだった。浴びせた犯人は、祭壇近くに立ちつくし、「汚れた蛇の血は洗わねばならない」とわめきながら、わななき震えていたのだという。

男は、母とは一番親密だった筈（どの程度の関係であったかは知らないが）で、教会行事をとりしきる男とは別に、経理の一切をまかされていた。

ところで、これも後で聞いた話だが、信頼されていた筈の母から、当時男は経理を私物化したのではないかと度々詰問され、母の生活

する奥の八畳間に出入りすることを禁じられていたという。

教会での地位は、昼夜を問わず、会長の私室に出入りすることができるかどうかで決まるというのであるから、男にとっては、実質的な破門を宣告されたということだったのかもしれない。

これが事件の直接の原因かどうかはわからないが、もしそうだとすれば、教会の内には典子のいうとおり、蛇や狐や狸の亡者たちが棲んでいるとしか思えない。

「加代子には、魔物が棲んどるんじや」

私は、父のことを思った。飲むと父は、必ず母のことをそういつたのだった。

生命に別状はなかったが、母にとってこの事件は、大きなダメージをもたらした。

厚めの化粧をすれば隠しおおせないこともないが、左頬から首筋にかけてケロイド状のひきつりが残った。一番心配されていた視力の方は、どうにか最悪の状態には至らなかったが、それでも常時眼鏡を必要とすることになった。

母は、日に何度となく覗いていた鏡を決して見ようとはせず、病院のベッドに上半身を起こし、一日中ぼんやり座っているのだった。前髪を垂らして一直線にそろえて流していた髪も伸びるにまかせ、乱れた寝巻の襟元もかまおうとしない。

しきりになにかをつぶやいているのでなにごとかと思うと、祝詞ではなく、

「大学病院に勤務する克夫兄さんのところへ遊びにいったって、別れてきたばかりだったの。西の空に真赤な雲が湧いてきて、ゆっくり広がったかと思うと、空を焼き始めた」

目に涙をため、あのくんだりを何度も繰り返している。

私は真実、母は惚けてしまったのだ、と信じて疑わなかった。典子などは、「いい気味よ。罰が当たったんだわ。なにせ立派な聖職者なんだから、自分の面倒は自分でみるのよね」と冷ややかである。

そして、「自業自得よ。だからいったでしょ、こんな蛇や狐や狸の化身みたいな神様にかかっていたら、きつとろくなことにはならないって」と、美容院にくる客のことばを借りて、常々そういつていた彼女は、勝ち誇ったふうでもある。

しかし、こうなってしまうと、というのは、あの「大学病院に勤務する克夫兄さんのところへ遊びにいったって、別れてきたばかりだったの」というくだりを久々に聞いたせいもあるが、私には、すっかりあきらめていた迷い猫が、ある日ひよっこり自分の部屋に舞い戻ってきたというふうに、やや胸をつかれる思いがないでもない。

「昼も夜も、それはそれは血の色に染めてね。私は、間違はなく克

夫兄さんの身に大変なことが起きたと直感したわ」

ベッドの傍にいて母の口元に合わせて同じことばをつぶやいていと、いつの間にか、まだ少女だった筈の母を、このめまぐるしい流れのなかに突き落としたのだったに違いない川棚というところでの出来事に思いを馳せている自分に気付き、ふと我に返るのだった。

それに、克夫兄さんとは、いったいどんな人だったのだろう。と、これまで考えたことのないことにまで思いをめぐらしてみたりするのだった。母はこのくんだりをしやべるとき、殆どの場合、ことばとしてではなく、うわごとみたいに呟くのであったから、克夫兄さんがどういう人であるのか、母にとつての克夫兄さんとはなんであつたのかなど、なにも聞かせてもらつたことがない。

ただ、実家のもう一人の兄から聞いた話によると、克夫という人は、医師としても研究者としても将来を嘱望されていたらしく、学問好きの十歳下の母を特にかわいがつていたという。母を大村に招いたのも克夫で、学費や生活費のこともすべて面倒をみてくれたのだという。

その克夫の身の上に起きた凶事。反射的に、対岸の炎に向かつて駆け出した母。

それからの母のことを思うにつけ、喉元を赤々と焦がし、どよめきのぼるあの得体の知れないめくるめくような流れのなかで、もはや自ら泳ごうとする意欲さえ萎えてしまったのではなかったか、と思われてならない。

幾条もの波に流され、たどりついた先で、T教の分教会長としての地位にまでのぼり、その絶頂時に農薬まじりの熱湯を顔面に浴び、顔中に包帯を巻くという姿となつた。

今度という今度は、顔にケロイドが残り、眼鏡を手放すことができない。きめ細かな肌に、少女みたいな黒い髪を垂らしていたのが、いまはとて手入れなどする気にもならないらしい。

ところが、母はするりと身を翻してしまった。その強靱な復元力がどこからくるのか、私のような市井人には信じ難いほどである。

教会の看板をサラリと降ろしてしまつと、「西田文化教室」という真新しい扁額を掲げた。扁額の下のプレートには、「算数、珠算、和・洋裁、手芸、文芸一般」などという字句が並べられ、母は化粧の下に隠した頬の傷など忘れてしまったのかと思われる表情で、改装したばかりの教室の入口で、夕日に染まりながら長い時間扁額を見上げていた。

長崎やG町ならともかく、私たちの住む村で文化教室などを始めても、はたして人が集まるのかといぶかつていたのだが、案に相違して、これまで教会に通つてきた層とは異なる嫁入り前の娘や、毎

日を姑の下に仕えている農家の若い嫁たちが集まりだした。

ということは、母が二度、三度と重ねてきた醜聞が、眉を顰めることではあれ、徹底した村人の顰蹙を買うまでには至らなかつたものであるらしい。それは、母が女学校出という村ではまれな肩書きをもち、同じ在で生まれ育ち、しかもいつの場合も一応被害者としてあつた、ということによるのかもしれない。

夜の部は、短歌教室というよりも、同人会の溜り場となつた。まだ明るいうちから酒が持ち込まれ、夜更けまで人の出入りが絶えないのである。通ってくる同人のなかには、かつての主宰の津田もいて、駈け落ち事件から十数年も経つのに、髪にいくらか白いものが混じつた程度で、七十歳をとうに過ぎた男とはとても見えない脂ぎつた匂いをまき散らしていた。

私には、母という人がいよいよわからなくなつた。

新しい試みを前に心を高ぶらせている母、その試みが実現すると、なにものかに憑かれたかのごとくに没入していく母。この過程が、母の身にいったい幾度繰り返されたことだろう。そして、この間、母は幾人の心を奪い、幾人の心を捨て去つてきたことだろう。

私には、そのわずか一つの過程であつたとしても、向こう岸まで泳ぎ着く自信はない。間近に母を見ていて、本当にそう思う。

「ご破産で願ひましては」
教室から洩れてくる母の声には、以前とちつとも変わらない張りがあつた。私は、このご破産で願ひましてはということばは、まさに母のためにあるのではないかと、耳を立てて何度も聞いたものである。

結局、母の文化教室は尻すぼみに消えてしまった。事件らしい事件もなく消えたということでは、母には珍しい始末のし方であつた、といつてもいい。

ところが、ようやく私たちの生活に溶け込み始めた母の方から、家を出るといい出した。

典子が結婚すると決まつた日、典子は離れの母の居間で、「私のことには、一切構つてほしくない」と切り出した。

母は、娘らしいことをなにつさせてやれなかつたから、せめてもの心づくしと思つてと、貯えの殆どをはたいて、村の娘には不似合いなほどの着物や箆笄や電気器具を買いそろえていた。

典子は、それらのどれにも手を触れないばかりか、母が典子の名を口にする度に、不快な表情を露にした。

「出てもらいたくないの、式にも。わかる。それが、私の精一杯の思いやりだわ。いい、私たちには父さんしかいないのよ。いったい私が、あんたのことをいまなんと呼べるといふの」

典子は、早口でまくしたてるのだが、途中で涙をあふれさせ、何度も同じか所でもいい淀んでしまった。

「式や費用のことはぼくと典子でなんとかするから、心配しないで欲しいんだ。これは、ぼくと典子が決めたことだから」

私までも、これまで胸につかえていた分を一気に吐き出すかに、母は私たちには一切関係ないということを、くどいほどいったのだった。

母は、私たちの出方にさすがにいたたまれなさそうであったが、その場では一言も返さなかった。

式の日は、離れに籠もったまま訪れてくる親戚や知人にも顔を合わさず、積み上げた典子のための嫁入道具の傍に、ぼつねんと座っていたという。

式が済み、典子が短い旅行から帰って嫁ぎ先に落ち着き、お礼参りも終わってしばらく経った頃、母は私を呼んで、「長い間世話になりました」と、急に他人行儀な口調できり出した。どうして出ていくのかという私の問いには答えず、「G町に小綺麗なアパートがあつて、ふと住んでみたくなつたのよ」というのみであった。

私たちは、顔と顔をつき合わせるほどの距離にいて、母が健康を害していることに気が付かなかった。

短歌教室に出入りしていた婦人の話によると、母はしばしば心臓の発作を起こして苦しみ、たまたま同人のなかに医師がいたので、その医師の処置でなんとか日常生活を保っていたのだという。母は、同人たちに、私や典子には病状のことを口外しないよう硬く口止めしていたので、数年というものの、私たちは全く知らなかった。

母がアパートに越して行って三日目ぐらいだったろうか、私は同人の婦人からの連絡を受けた。母が危険な状態である、という。

驚いて駆けつけた私に、ちようど医師の処置を受けて症状が落ち着いたのか、母はいく分青くむくんだ表情ではあつたが、たいしたことないわよと笑ってみせた。

母は慣れないアパートで、しかも短歌教室の同人にも転居したことをまだ知らせなかったなかで、一人発作と向かい合っていたのだろう。目尻には、流れた涙の跡が筋となって残っており、苦悶のあまり力を込めたのか、枕元のシーツがよじれていた。

「帰ってきたらどう」

私がいようと、母はすぐに首を横に振った。

「しばらく休んでさえいたら、楽になるのよ。きっと、越してきたばかりで気が動転していたんだわ」

後はなんでもない、というふうに着団から出した手を頭の上で振ってみせる。

しかし、母の病状は意外に重いのだった。部屋を出た私の後について出てきた医師が、どこかそこらでお茶でも、と誘うので店に入ったのだが、医師は真剣な顔で、いまは薬でなんとかもちたえているが、間違いない近いうちに手術をしなければならなくなるだろう、といった。

なんでも、全身に血液を送り出す弁が殆ど詰まった状態で、血液が逆流するために放っておけない、ということを経々と話してくれた。しかも、母の症状は、最初の子供である私を生んだ頃に発生した筈だ、という。

「じゃあ、あの人が自分の症状をおしてまでも、私たちをこの世に送り出してくれたというわけ」

これを聞いた典子は、そういつたきり黙ってしまったが、しばらくするともとの典子に戻って、「そんなことなら生んでくれなきゃよかったんだし、死ぬほどの思いをして生んだ子供をどうして簡単に捨てられるのよ」といい始めた。

ところが、当の母の方は発作がないときは意にかいしないらしく、今度はアパート周辺の住人を集めて、和裁や編物を教え、夜は再び部屋を同人会の溜り場に提供してしまったのだった。

あれから何年になるのだろう、と考える。初めて母の病状を知らされた日から、十五年以上にはなる筈である。その間、私は度々医師に会って母の状態を聞いた。

医師は、そのときどきで表情を濁しながら、「なにしろ、本人は自分をちっとも病人だと思っていないんですから。まあ、それが幸いともいえませすし、次の段階に進めない要因でもありますね。いわせてもらえるならば、まだ体力のあるいまのうちに、手術にふみきった方が最良だと思うのですが」と、結局は同じ診たてを聞かされる。

母の方は、与えられた薬も気が向かないと何日も飲まず、近所の婦人たちを招いて手芸や洋裁をしたり、同人誌仲間と旅行をしたり、夜どおし喋り続けたりするものだから、その度に医師に叱られるのであったが、「私の体はもう二十八歳のときに海に沈めたのよ。いえ、十五歳のときに空にのぼってしまったわ」などといって、とりあおうとしないのである。その挙句発作に見舞われ、私たちや同人誌仲間の手をわずらわす、ということになった。

「悪いけど、ちよっと寄らせてもらったのよ」

母は私のいない間に、度々転がり込んできた。妻の京子も昼間は職場に出るので、私たちが帰宅すると、麻美や喬と一緒にトランプに興じている最中、という具合だった。

京子の方は、散らし放題で出かけた部屋に勝手に上がり込まれた

ということに顔を赤らめるより先に、子供たちに合わせて作る料理が母の口に合わないため、いま戻ってきた道を、急いで商店街の方にひき返さなければならなかった。

「私なんぞがこれた義理じゃないけどね」

いつまで経つても、母は私に対してどこか他人行儀で、そのくせ、「この居間のカーペットの色、もう少し明るくならないかねえ」とか、「昼間、子供たち二人だけを部屋に閉じ込めるの、かわいそうでみてられないよ。今日だって、火の気のないところで、こうして背中丸めて、ぼおっと隅っこにうずくまっていたのよ」などと、思いついたことを遠慮なくいう。

「孫が部屋の隅にうずくまってるのがかわいそうって。そんな人並の気持があるのだったら、私たちを平気で置き去りにするなんて、できなかつた筈じゃない」

どこで話を聞きつけたのか、典子から電話が入る。

「考えてみれば、なにも、平気で置き去りにしたとはいえないのかもしれないけどさ」

私の頭に、度々繰り返された父と母の口論の様が蘇る。

「勿論私だって、多少は割り引いて考えてもいいわよ。でも、その後よ。あの人のしたい放題にしてきたこと。なんなの一体」

「若いときは、なにがなんだかわからないときがあったのかもしれないさ。でも、この頃かなりしおらしくなってきたけどね」

「ずい分と、あちらのかたを持つじゃない。いい、はっきりいうけど、私たちはあの人の子供なのよ。事実なのよ、これは。悲しいことだけれど。しかし、あの人にとって私たちは子供であっても、私たちにとっては母ではない。肉親でもないわ。なにをしてくれたとか、してくれなかったとか、もうご破産にしてあげる。だって、あの人はいろんなことを教えてくれたわ、身をもつてね。口であしろとかこうしろとかいわずに、自分が次々になにかをしでかすことだね。だから、私のたった一つの願いは、これ以上現われて欲しくないのよ、私たちの前に」

典子は、最後にはいつもことばを荒げ、電話を切る。

私にだって、典子のいい分がわからないわけではない。できることなら、きつぱりと母を退け、京子の負担をなくし、父と清治の位牌だけを守って暮らしていきたい。しかし、私が典子と唯一異なるのは、「大学病院に勤務する克夫兄さんのところへ遊びにいつて、別れてきたばかりだったの」という、あのくだりを知っていることなのである。

「お前のおふくろ、やっぱり昔の癖が抜けないらしいぜ。こんなこ

とは、歳とは関係ねえのかな」

父の釣り仲間であつた光義が、いまでもときどき私の家に立ち寄つてくれる。

父や私たちが住んだ家を立て替えるときも、「おめえ、親父の魂が住まっているところをぶつ壊すのかよお」といいながらも、親身に相談にのつてくれたし、京子との結婚のときも親代わりを努めてくれた。

光義の話すところによると、母のところにもまた男出入りの噂がたち始めたというのである。相手は銀行マンだとかで、同人でもなんでもないのに、三日に一度は通つてくるという。

預金の勧誘ではないかと聞く私に、「そこはそこ、この第六感でものは馬鹿にできねえもんさ」と、自分の目で確かめたわけじゃないからとはいいながらも、間違いないのだという。

発作の現場にときどき駆けつけたことのある私には、そんなことはとても信じられないことなのだが、もしそうだとすると母の体内には、なにか私たちの思い及ぶ範疇を超えた力が潜んでいるのかもしれない。

「暮れの冷たい潮のなかで抱きあげたときの加代子の感触、こいつはいま考えても身震いするくらいだぜ。なんていうか、男にしかわからねえ、ゾクツとくるやつだ。玄三のド阿呆にはもったいなくて、三倍も四倍もおつりがくるくらいに嬉しかったのによ」

光義は、母の話をするときは唇に唾を溜め、興奮してくる。

「しかしなあ、玄三と加代子の間になにがあつたか知らねえが、もともと加代子は生きている限り、良くも悪くも尋常では済まない女だ。そういうふうなところが透けて見えるのさ、俺には」

光義の話は、結局、男から見た女、というところに落ち着くのだが、私もそれは多分に当たっているのではないかと思う。

いま目の前に横たわっている母の寝顔を眺めていると、これらのついで数年前までの出来事が、本当に現実にあつたことだったろうか、と首を傾げたくなる。ふくよかだった頬は信じられないほどにこげ、男たちの垂涎の的であつたのかもしれない胸は、あばらを浮きあがらせ、そのあばらをくるみ込む格好に包帯がぶ厚く巻かれている。母は、呼吸をするのさえおっくうそううで、火傷のひきつり跡の残つた顔をゆがめて鼻のチューブを抜き取ろうとするのだが、指を顔近くに持ち上げることかなわならしい。

集中治療室から元の病室に戻されてはきたものの、症状は本当に一進一退というところで、その経過が別室のモニターかなにかでわかるのか、ノックもなしに若い医師が突然とび込んできたりする。

母は、医師の呼びかけにはか細い声で応えてはいるが、うまくこ

とばにならない。そして、まどろっこしそうないらだちを眉間に浮かべ、しまいには放心の態になる。

「血圧がなかなか安定しませんねえ。手術は百パーセント成功しましたから、後はご本人の頑張りだけです」

生真面目そうな医師は、母の顔をじっと見詰め、少し首をひねりながら出ていく。

これまで、綱渡りさながらの母の生きざまをいやというほど見せつけられてきた私であるが、今度という今度こそは、あるいは綱の端が宙ぶらりんになるのではないかとという予感がしないではない。

たとえ手術が成功したとはいえ、回復を待つ間にも事態は急変するのかもしれないのだし、もしいまの危機をのりきったとしても、綱の端を自在にとび移るほどの力は、再び戻ってこないのではないかと、思われてならない。

しかし、母は、これまで幾度となく私たちの思いを超えてきた。いや、私たちが裏切り続けてきた。だとすると、今度もまた、死力を尽くして私たちの裏をかくつもりでいるのかもしれない、と思ってみたりもする。

午後になつて母の呼吸が落ち着いてきたので、私はうち重なる疲れもあつてか、ついうとうとしてしまった。いったい、どれだけまどろんでいたのだろう。突つ伏していた顔に温かいものが触れたので目を覚ますと、母の指が私の耳朶近くに伸びている。私は、その指を無意識のうちに握ろうとして、母の顔を覗き込んだ。

「克夫兄さんのところに遊びにいつて」

うっすらと開かれた瞼の奥の瞳は天井の一点を見定め、かすかに動く唇からとぎれとぎれのことばが洩れている。吐く息と、途切れがちに吸い込む息との間で、声は殆ど声にならない。

「西の空に真赤な雲が湧いて、昼も夜も、それはそれは血の色に染めてね。私は、間違いなく克夫兄さんの身に大変なことが起きたと直感したわ。そう、妹の私にはわかるの」

母のことばはどこか甘つたるく、切な気だった。天井の隅に、なものかが潜んででもいるのか、母はそのなにかに向かい、語りかけている。苦しそうな息の底で、一粒、また一粒と、小さなことばを拾い、語りかけている。

そのとき、私の胸を貫き、いきなり駆け抜けていくものがあつた。母は、十五歳のあの日以来、空へ空へとひたすら駆けり続けているものではなかっただろうか。めくるめくようなどよめきのなかで、母の心は、十五歳のあの日、既に天空へのぼりつめてしまっていたのではなかったのだろうか。

「この胸にしびれに似た痛みがずっと走ったわ。私は、思わず克夫兄さんの名を呼びながら、その真赤な空に向かって、無我夢中で駆

け出した」
私は、いま母はその兄や清治に導かれ、ゆつくりとゆつくりと、
あの真赤な空に向け、漂い始めたのではないかと、思った。
(了)